

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第8回

サラマンカ便り

—2002年欧州文化首都の現状と課題

稲賀 繁美

(いながしげみ/国際日本文化研究センター、
総合研究大学院大学)

スペイン、カスティージャの古い大学町、サラマンカで教鞭を取っています。マドリッドから「西北西に進路を取れ」。250キロ、日本では考えられないほど座り心地のよい長距離バスで2時間半、周囲の風景を堪能していると、やがてトルメス川のほとりの丘のうえに、大聖堂や大学の古めかしい建物が見えてきます（実際には北米カナダ経由の学会疲れと時差ボケで、ほとんど眠り込んでいましたが、目が覚めると、その瞬間の、秋の最後のイベリア半島高原地帯は、それは美しいものでした）。大聖堂は、もとはといえば12世紀に着工されたもので、レコンキスタ運動のなかでの司教座の「復帰」は、ベリゴー出身のイエロニムスという名前の司教に1102年になされた、というのが、教会に今日なお保存される羊皮紙文書から得られる解釈です。この日付からすれば、大聖堂は本年度創建900年を記念する年を迎えたということになり、内部を修復した鐘楼では、特別展も設けられていました。

サラマンカといえば、ヨーロッパでは、パリ、ポローニャ、それにオックスフォードともならぶ、由緒ある最古の大学都市のひとつです。レオン王国のアルフォンソ9世によって1218年に設立された学堂は、賢王と讃えられるアルフォンソ10世のもとの、国際的な水準へと高められ、ローマ教皇ア

レハンド4世によって、大学と公認されました。現在のサラマンカ15万人ほどですが、学生数は3万2千、教職員は3千を数え、都市人口の2割を凌駕しています。とはいえこれも最近10年の変貌に負うところが多く、新たに旧市街の西側に建設されたミゲル・デ・ウナムーノ・キャンパスの稼働とともに、学生数で5割、教職員数で2倍増という大躍進を遂げているところです。実は、1984年にも訪れたことがあるのですが、そのときは、なんとなく老人と観光客ばかり目立つ、過去の栄光に埋もれた黴臭い町、という印象を得ていました。それが今回来てみて、すっかり若返った様に呆れました。

実際サラマンカは、1988年、ユネスコの世界文化遺産に登録され、2002年にはヨーロッパの文化首都に選ばれました。地元の人々の言うところでは、欧州連合からもかなりの資金供与があったとのことと、旧市街の主要部は、見事なまでに化粧直しが進んでいます。国内ではトレドやコルドバが観光に依存した、切り花か造花のような美を見せつけているのにたいし、サラマンカには地元の生活文化が立派に息づいて生きている、という感触を得ます。ヨーロッパのほかの有名な大学都市、例えばドイツのハイデルベルクやチュービンゲンに比べても、いまやサラマンカのほうが活況を呈しているのでは、との印象です。

11月の初頭に当地に来てみると、今年は秋の好天が長続きしたとのことで、最初の何日かは、日中はまぶしいほどの陽光に照らされ、澄んだ青空と、高原に行く白雲とを背景として、大聖堂やイエズス会の学堂が、くっきりとした光と影とのコントラストのなかに浮かび上がっていました。それが夕刻も迫り、トルメス川のはるか西側に太陽が傾くと、丘の上の砂岩の建築たちは、いっせいに橙色や紅色に染まり、やがて夕闇のなかに没してゆきます。そしてそれと交替するように人工光線が旧市街を照らしますと、町並みは一変した様相を呈します。わずかに15万人の人口を数える都市に5,000軒を越えるバルがあるとのことで、仕事が引ける時分には、カジュアルな服装の若者ばかりか、洒落た着こなしの老夫婦も含め、信じがたいほどの群集が、石造りの町並みに溢れ始めます。そして週末など、車の入らない世界遺産の石畳を舞台に、老若男女を問わぬにぎやかな喧噪が、深夜まで続きます。

つい、同じような規模の日本の地方大学都市と比べてしまうのは、悪い癖かもしれません。私が7年ほど住んだ三重県の津市など、夜8時を過ぎれば、町は死んだように静かになり、活気などどこにも感じられませんでした。島根県の出雲や松江といえ、夕日の美しい屈指の地方都市ですが、それでもサラマンカの夜の一般市民の賑わいに匹敵するような情緒は皆無です。なぜ日本の地方都市は、いや大都市でもでしょうか、こうも人間的な味わいのない、詰まらない、寒々しい場所になってしまったのでしょうか。もちろん午後の2時から6時までが事実上機能停止というスペインの生活習慣には、能率一点張りの日本人としては、必ずしも馴染めません。それでもその代価が、夜の帳の降りる頃からバルでの社交と、夜9時を過ぎてようやく始まる夕食、それに街のあちこちで頻繁に催される演奏会や国際ジャズ・フェスティバルといった贅沢な時間の過ごし方にあることは見逃せませ

ん。日本で実現がむりならば、その分、つかの間のスペイン滞在を満喫しなければ。しかしこれにはかなり強靱な体力が必要不可欠だな、などと、午後2時からの昼食に疲れ果て、午睡を嗜む利那に思います。

サラマンカにしばしの滞在をすることになったのは、1998年に開設された、日・西文化センター (Centro Cultural Hispanó-Japones) との係わりゆえのことです。市庁舎を囲む、ヨーロッパでも有数の美を誇るマヨール広場から程近くにある16世紀のサン・ポール宮が、スペインに進出した日本企業などによる出資によって改装されたもので、今年で開設3周年を祝いました。なんでもサラマンカの大聖堂に壊れたまま放置されていたパイプ・オルガンの修繕を日本人技師が受けもち、当時の皇太子夫妻の肝煎りもあって、その完成が言祝がれたのが1990年。さらに技師の出身地、岐阜県の県民会館にこのオルガンの複製が設置され、サラマンカホールと命名されたのが98年、といった背景があるそうです。日本の皇室が、特定の文化事業にとりわけ名前を出すことは、宮内庁としては極力回避しているはずですが、それだけに、サラマンカの文化事業は、行政主導の色彩が濃厚だった様子です。

1999年以来、サラマンカ大学の自由聴講授業の講師として、毎年日本からスペイン語に堪能な各分野の第一人者の方々が、一週間の集中講義に派遣されてきました (99年には神戸大学の松下洋先生、関西外国語大学の田尻陽一先生と筑波大学の細野昭雄先生。2000年度には、フェルナンド・ガルシア・グティエレス先生、上智大学のアントニオ・ルイズ・ディノコ先生、学習院女子大学の阿曾村智子先生。2001年度には東京大学の恒川恵一先生、上智大学の清水憲男先生、早稲田大学の市川慎一先生。そして2002年度には、元東京大学の大貫良夫先生、同志社大学の松下マルタ先生が、予定されています)。これらの方々は、日本サラマンカ大学友の会による派遣ですが、当方はこれとは別に、もっか国際交流基金から、一学期の文化史授業の担当を命じられて、11月から年末まで、当地に滞在しているところでした。

スペインでは、現在まで外国語としての日本語講座は存在しましたが、日本文化学科のようなものは、大学の学部レベルに存在していませんでした。この冬にも、東洋文化研究学科の設立が閣議で了承される見込みで、うまく行けば来年度には、マドリッドの自由大学に中国と日本、バルセロナに中国、そしてサラマンカに日本を専攻する学部レベルの学科が設立されることになっています。その準備として助言をせよ、というのが小生に与えられたいまひとつの業務です。とはいえ、現地の側は、目下のところ来年度からの新設学科の準備は

まったく進んでおらず、新規の人事もいつになったら始動するのか、なお不明です。センターには、この学科新設も見据え、元スペイン大使、林屋栄吉氏のご尽力により、この春、1800冊にのぼる日本語を中心とする書籍の寄贈がなされました。物理的にはセンターの文化活動の基礎が、第一軌道に乗った段階ですが、正念場は、これから1年間、日本学科の創設が次の軌道に乗るかどうか、日本とスペイン語圏との文化交流の未来の一端がかかっているといっても、決して過言ではないと思います。